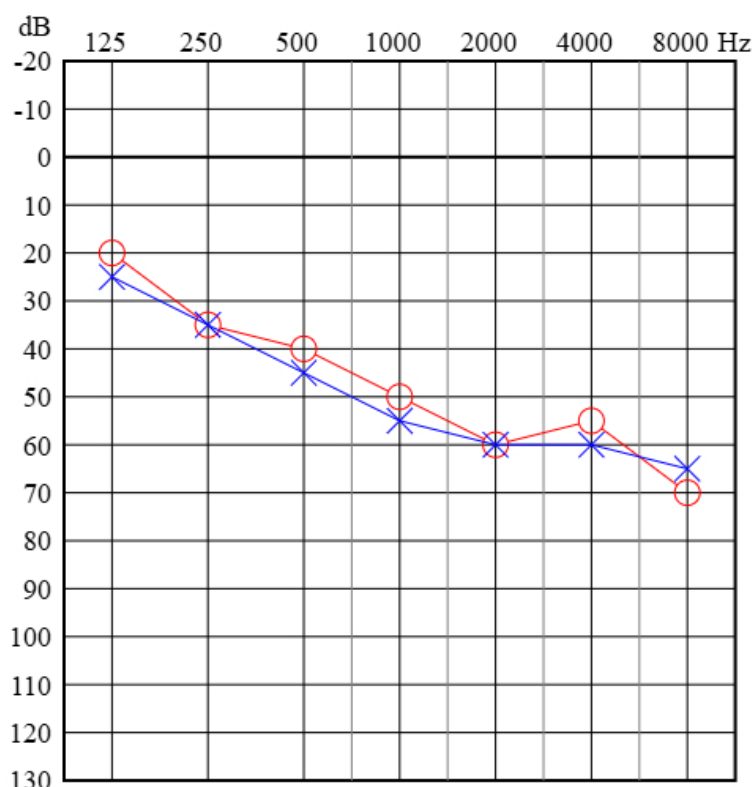




秋の始まりは、日本列島に停滞した線状降水帯による不安定な天候でした。行楽シーズンの10月はどのような天候になるでしょうか。カスタネット通信10月号は、小児の軽度・中等度難聴に関するお話しです。

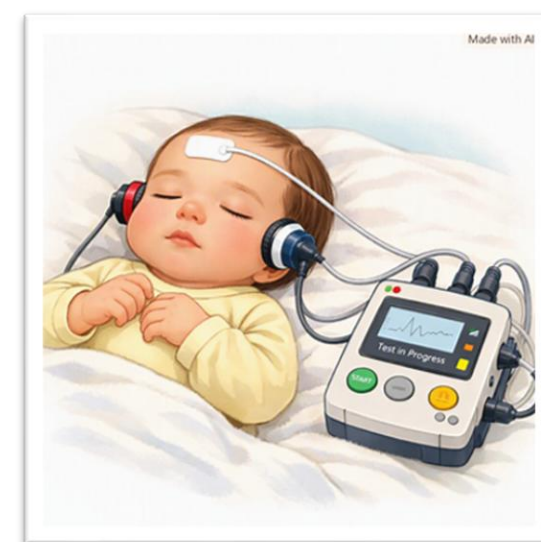
小児の軽度・中等度難聴



左は中等度難聴がある人の聴力を示すオーディオグラムです。オーディオグラムの横軸は音の高低(Hz)を、縦軸は音の強弱(dB)を表します。○が右耳、×が左耳の聴力で、聞こえが良いほど上に記されます。“聴力”は500Hz、1000Hz、2000Hzの平均で表します。25dB以上～40dB未満が軽度難聴、40dB以上～70dB未満が中等度難聴です。両耳の聴力が70dB以上になると、身体障害者手帳が取得でき、補聴器購入時に公的な助成を受けることができます。

さて、ここで小児の軽度・中等度難聴についての“歴史”を少し振り返ってみたいと思います。

現在は多くのお子さんが産科で“新生児聴覚スクリーニング検査”を受け、難聴の疑いがあるお子さんは生後間もなく、耳鼻科で精密聴力検査を受けます。そのため、軽度・中等度難聴であっても、1歳前に補聴器を装用し療育を開始できるようになりました。



“軽度・中等度難聴であっても”、と書いたのは、新生児聴覚スクリーニング検査が始まった2000年代初頭以前は、軽度・中等度難聴は3歳半健診で見つければ早い方で、就学前に“ことばの発達の遅れ”、“発音不明瞭”、といった理由で気づかれることが多くあったからです。軽度・中等度難聴のお子さんは、“小さい声”、“うるさい場所”、“大人数での会話”など、聞こえにくい場面もありますが、聞こえている場面もあり、この反応の不安定さが発見が遅れる要因の一つでした。難聴を早期に発見し適切な対処をすることで、難聴による“ことばの発達の遅れ”、“発音不明瞭”、そして“コミュニケーション上の問題”を最小限にする、これが新生児聴覚スクリーニング検査導入の目的でした。

新生児聴覚スクリーニング検査は導入されたものの、当初課題がいくつかありました。生後直後に発見された軽度・中等度難聴のある赤ちゃんの療育をどこで行うか、そして補聴器購入費用です。身体障害者手帳を取得できる高度・重度難聴であれば、補装具費を申請することで補聴器購入の費用の助成を受けられますが、軽度・中等度難聴はその対象では無いため、自費で補聴器を購入する必要がありました。20～30万円の負担は家計にとって大きく、軽度・中等度難聴に対しても助成が必要だという動きが起きました。そして開始されたのが、18歳未満の小児に対する軽度・中等度難聴児補聴器購入費助成です。町田市で2013年から、相模原市で2014年から始まったと記憶しています。これにより、軽度・中等度難聴であっても、補聴器購入時に公的助成が受けられるようになりました。

さて、ここまで小児の軽度・中等度難聴の“歴史”をご紹介したのは、夏休みに実施した“軽度・中等度難聴がある方の交流会”の内容を紹介するのに、軽度・中等度難聴の背景を知っていただいた方が分かり易いだろうと考えたからです。



軽度・中等度難聴のあるお子さんは、補聴器を装用して地域の保育所、幼稚園、小学校…と進学していくと、同年代の補聴器を装用している子ども達と関わるのがなく成長することもあります。

今回、自分と同じ軽度・中等度難聴のある人と難聴や補聴器についてお話しがしてみたいという相談があり、夏の交流会を開催しました。参加者は社会人2名、大学生1名の計3名で全員20代、新生児聴覚スクリーニング検査導入前後に生まれた方々です。

交流会では、難聴の開示や困難を感じる場面、支援の求め方など具体的なエピソードが多く挙がり、私たちにとっても軽度・中等度難聴のある方々にお会いする時に参考になるものでした。

以下、一部をご紹介します。

1. 難聴の理解と開示

- ・ 幼少期には周囲との差や困りごとに気づきにくく、補聴器の使用や実際の場面を通じて、初めて聞こえにくさを認識することがある。
- ・ 難聴の程度や困る環境を自分でも理解できず、“それほど聞こえないわけではない”という思いから、開示や必要な配慮の判断が難しい。
- ・ 周囲に難聴を伝えていると聞き返し易いが、相手の反応や過度な気遣いへの不安が心理的負担になる。

2. 社会生活での困りごと

- ・ 教室やグループ討議、バイト先など雑音の多い環境では、近くの声でも聞き取りにくい。
- ・ 学生時代は集団行動が多いので友人の動きを手がかりに対応できたが、社会人になると個々で求められることが異なるので対応が難しくなる。
- ・ 高校までは担任に相談できたが、大学では相談先が分かりにくい。就職活動や勤務開始時には、どこまで配慮を求めるか、いつ難聴を伝えるかに迷いがある。

3. コミュニケーションの工夫

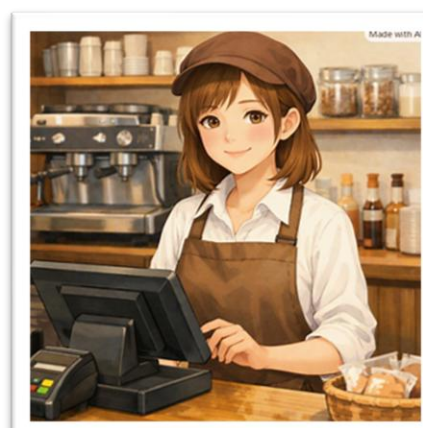
- ・ “補聴器を使用しているため聞き返すことがある”など、状況と必要な対応を簡潔かつ具体的に伝えることが有効。
- ・ 時間や名前など重要な情報は、理解できるまで聞き返す。電話では文字起こしも併用し、視覚情報で補っている。

5. 自己受容と将来への不安

- ・ “みんなと同じでいたい”という思いと、難聴も自分の一部だと受け止める気持ちの間で揺れている。
- ・ 同じ難聴者でも聞こえ方や経験が異なるため、当事者グループにも入りにくさを感じる場合がある。
- ・ 高額な補聴器の買い替えに不安がある。聞こえる人には不要な費用が継続的に必要になることに負担を感じる。

4. 支援を求めることへの迷い

- ・ 常に困難が生じるわけではないため、“自分のためだけに頼んでよいのか”、“まず自分が最大限努力すべきではないか”と配慮を求めることをためらってしまう。
- ・ 高度・重度難聴の人と同じ支援を受ける資格はないと感じることもある。まずは近くの人に難聴を伝えるなど、段階的に支援を求めることを考える。



後方の機械音で
お客さんの声が
聞きにくくなる

広い講堂では、
前方の席でないと
聞きにくい



他のグループの
声が邪魔して、
聞きにくい

対話者に、「難聴があります」「補聴器をつけています」と言われたら、多くを説明されなくても必要なサポートを考えられる、または「どうすればいい？」と聞けるなど、難聴のある人が全部を説明しなくても良いように、“難聴のある人はどのような場面で困るのか”“どうすればことばが聞き取りやすくなるのか”といった難聴についての理解を社会に浸透させていくことも必要なのだろうと考えました。